

もう一つの戊辰戦争 江戸民衆の政治意識をめぐる抗争 その一

奈倉哲三

Another Boshin War : Feud over Political Awareness of Common People in Edo, Part I
NAGURA Tetsuzo

はじめに

序 民衆の政治意識形成と幕府法支配の崩壊(二月中旬まで)

①『太政官日誌』と『中外新聞』と藤岡屋情報(三月上旬まで)

②江戸開城をめぐる(四月十四日まで)

③大総督宮入城と江戸(四月二十一日まで)

結 戊辰戦争第一期、江戸市民・民衆の意識をめぐる抗争の特質

【論文要旨】

戊辰戦争期に江戸で生活していた多くの市民・民衆は、東征軍による江戸駐留に対して拒否的な反応を示していた。「新政府」は江戸民衆のそうした政治意識を圧殺・再編せざるを得ず、両者の間で激しい抗争が展開される。この抗争は、新旧両権力間で展開している戊辰戦争とは異なる、もう一つの戊辰戦争である。本稿は、このもう一つの戊辰戦争を、民衆思想史の視点から説明したものである。ただし、本稿は正月十二日慶喜東帰から四月二十一日大総督宮入城までに限定し、その間に江戸民衆の眼前で生じた事象を分析し、江戸民衆の意識・思想をめぐる抗争の特質を説明した。旧幕府諸勢力の動きは多様であったが、小諸藩主牧野康済の歎願書は際だっていた。ひたすら、臣子として徳川家に仕えることで朝廷に仕えるのだ、との論理一つを主張、朝命だからとて慶喜追討の兵は出せないと突っ張り、出兵拒否で「朝廷の損失を補う」とまで直言した。この論理が大総督宮入城当日に、江戸市民の眼前に示されていた。

一方、東征軍の江戸入り総過程を通じ、江戸市民の負担は急激に膨張する。それにより「万民塗炭之苦」を朝廷が救うとの論理は破綻し、「天子之御民」は空語となる。江戸町民は、東征軍入城によって下層民にまで負担が及ぶ状況の改善を町奉行所に提出、入用が嵩んだ四月五日には町人惣代九十余名が歎願書を先鋒隊宿所に提出した。他方、柳河春三は二月下旬以来、「新政府」嫌悪を根底に据えつつも軍事的抵抗は無益とし、外国交際と言論を重視する市民派新聞「中外新聞」を発行し続けていた。この市民派新聞が背景の力となって、四月二日、江戸町奉行佐久間鍾五郎は市中困窮人への御救米支給を決定した。統治権の委譲を目前にして、新権力へのギリギリの抵抗として、市民・民衆の側に寄り添う政策を打ち出したのであった。以上が、この時期江戸市民・民衆の意識をめぐる抗争の特質である。

【キーワード】 戊辰戦争、江戸民衆の意識・思想、市民派新聞